《研究ノート》

ローマ帝国による統合をめぐって

南　川　高　志

はじめに

ヨーロッパ連合（EU）によるヨーロッパ統合が進みつつあった時期、EU の先駆として古代のローマ帝国に言及されることがしばしばあった[1)]。ヨーロッパ統合の進展は、「かつてあった古代『ローマ帝国』の版図を再び 1 つの政治システムの下へと統合することを意味した」[2)] とまでいわれたのである。確かに、ローマ帝国の広大な支配領域では共通の通貨や法、度量衡や公用語が通用し、人々の自由で安全な往来が実現していたと一般に理解されているので、EU の目指すあり方を先取りしていると解釈することは可能である。しかし、先駆とされたローマ帝国は、本当に広大な支配領域の統合を実現したのであろうか。また、そもそもローマ帝国は統合の意志を持ち, 統合を目指した政策を行っていたのだろうか。本稿は、こうした統合というローマ帝国の世界史的意義に関わる問題に対して、どのような研究や調査が必要であるのかを考えるために、学界の動向を踏まえて課題の整理を行うことを目指すものである。

改めていうまでもなく、ローマ帝国による支配領域の統合の実態については、帝国の統治構造を解明するという観点から、行政システム、法制度、都市の構造、そして経済活動などについて、従来から熱心に研究されてきた。しかし、研究の過程で、帝国の側に立ってどのように支配し統治したかを考えるだけではなく、被征服者、被支配者の側から帝国の有り様を考えようとする研究がなされるようになった。そして、統治する者とされる者との間の共働や被支配者側の主体性を評価する研究の成果も提示され、ローマ帝国のそれまでの歴史像は大きく変更を求められることになったのである。

統合の問題については、Brill 社刊の Impact of Empire シリーズ中に、関連するテーマの論集がすでに数点刊行されている。とくに、統合そのものを題名に掲げた 2014 年刊行の G. de Kleijn & S. Benoist（eds.）, *Integration in Rome and in the Roman World*[3)] は、司法や歴史、社会の構成、軍隊など、多様なテーマを論じており、欧米学界における問題の取り組み方と可能性とを教えてくれる。また、遡って 2000 年刊行の C. Ando, *Imperial Ideology and Provincial Loyalty in the Roman Empire*[4)] が、壮大なスケールで実質的に統合の問題を扱っている。しかし、本稿では、20 世紀の終わり頃から、統合の実態の理解や解釈について、イギリスの

一部の考古学者たちが旧来の学説を厳しく批判し、新たな提案を次々行っている点に注目する。そして、こうした考古学者の側からの問題提起や提案がなされて以降の研究状況を参観しながら、今後どのような問題の捉え方、分析を行えばよいのか課題の整理を試み、解決のための展望を見出したい。

1 「ローマ化」批判とその後

ローマ帝国が広大な支配領域の統合を実現したか否かという点について説明するために用いられてきた最も重要な概念は、「ローマ化」であるといってよいだろう。この概念とそれへの批判についてはすでに別のところで述べたことがあるが[5)]、ここでは後述の研究動向分析のための前提となるよう、旧著での叙述を補って説明しておきたい。

19 世紀の後半、「ローマ化」(Romanisierung) という概念を最初に用いた Th. モムゼンは、帝政前期のローマ帝国において、ローマに征服された地域に言葉や法、宗教などローマ風の様式が次第に伝播し、帝国の各地が均質化していく過程をこの言葉で説明した[6)]。このモムゼンの業績を踏まえながら、20 世紀初頭にこの言葉を英語 (Romanization) で用いた F・ハヴァフィールドは、ブリテン島を対象にローマの征服後の「ローマ化」の進展を論じたが、モムゼンと異なり、ハヴァフィールドはこの概念を「文明化」の意味で用いた[7)]。彼は、ローマ人がブリテン島を征服後に「文明化」したと考えたのである。そこでの「ローマ化」とは、ローマ人ではない人々がローマ人の言語、物質文化、芸術、宗教、そして都市的な生活様式を与えられることを意味した。ローマ風の文化が先住者の文化を駆逐してローマ・イタリア様式に置き換えていった、という理解である。ハヴァフィールドはこのローマ化がブリテン島すべてで実現したと考えていたわけではなく、ローマ化が成功せずに先住者の文化が残った地域があったことを知っていたが、都市エリートのローマ化が達成された点を高く評価したのである。

ハヴァフィールド後、R・G・コリングウッドのように批判的な姿勢を取る学者もいたが[8)]、「ローマ化」はローマ帝国史の重要な説明概念として用いられた。歴史研究だけでなく、考古学的調査も、この概念に沿うように都市やウィッラ (農業屋敷)、軍団要塞など、ローマ人が居住した地域や場所について重点的に行われ、ローマ化の進展の度合いや状況が報告されてきた。

1970 年代になると「先住者中心主義」の立場をとる考古学者たちが先住者たちの文化的伝統を重視し、「抵抗」の観念を持ち込み、それまでの研究や調査を批判した[9)]。さらに 1990 年代に入ると、「ポスト帝国世代」を称するマーティン・ミレットがハヴァフィールドと同じブリテン島のローマ化を論じ、先住者の役割、とくに属州エリートを重視する折衷モデルを提案した。彼は、ローマ文化を採用するか否かは、属州のエリートたちが積極的に選択したと考えたのである[10)]。

しかし、イギリスの考古学者でポスト・コロニアリズムの立場に立つ人たちが、このミレットの学説も含めて「ローマ化」を厳しく批判した。リチャード・ヒングリをはじめとする批判者たちによれば、「ローマ化」概念はハヴァフィールドが活躍した時代、すなわちイギリスの帝国主義時代を背景にしたものであり、植民地支配のために「文明化の使命」を語った時代の産物である[11]。Romanization は「帝国主義的言説」というわけである。また、ハヴァフィールドの「ローマ化」に従うならば、ローマ到来以前の先住者社会には歴史も文化もなかったことになると同時に、先住者たちはローマの文化を評価し欲したと根拠なく理解することになる、と批判者たちは指摘した。ハヴァフィールドが文化の同質性を強調し、都市とそのエリートを偏重したことが、その後の発掘や研究のあり方に悪い影響を与えたとも批判している。ミレットの研究についても、そのローマ化のモデルは、ハヴァフィールド同様にエリート層に焦点を置いている点で、「単にハヴァフィールド・モデルの裏面（B 面）にすぎない」（デイビッド・マッティンリ）[12] と手厳しい。批判的な見解はローマ時代のブリテン島の解釈だけでなく、他の属州にも及んだ。

これらの考古学者たちの「ローマ化」批判は、「ローマ帝国主義」の研究から来たものであった。彼らのこのテーマに関する最初のまとまった論集は 1997 年に刊行された[13] が、そこではローマ帝国主義とローマの支配に対する先住者の抵抗とが中心テーマになっている。また、その論集の副題は「ローマ帝国における権力・言説・乖離する経験」となっており、E・W・サイードの『文化と帝国主義』の影響がはっきりと窺える[14]。

2001 年、批判者たちの一人、J・ウェブスターは、「ローマ化」に代わる概念として「クレオール化」を提案した[15]。この概念の基になった「クレオールは」、周知のように、主に中南米や西インド諸島などで生まれ育ったスペイン系などのヨーロッパ人をいう。しかし、この「クレオール化」という概念は、ヨーロッパと非ヨーロッパの言語が接触して変化した言語（ピジン語）が母語として話されるようになった「クレオール語」の性格を捉えて提案されたものと考えられる。つまり、「クレオール化」は、上述の新世界の地域で生じたような多文化を調整する過程を意味するものとして提案されたのである。「ローマ化」は、属州エリートがローマの象徴となるモノを採用する過程であって、属州の多数を占める住民には適用できない。ローマの属州では、属州エリートの観点から見る「ローマ化」の研究よりも、征服後の有り様を下層住民の観点から考えることができる「クレオール化」の方が好ましい。故に、ローマ化されたと考えるよりもクレオール化されたと見なす方が適切である。提案はこのようなものであった。

だが、このクレオール化の概念の議論が深まらないうちに、今度は「グローバル化」を用いて説明する試みがなされるようになった。この議論の先駆けとなった研究者は、ハヴァフィールドを厳しく批判したヒングリである。2005 年、彼は *Globalizing Roman Culture: Unity, Diversity and Empire* と題した著作を刊行し[16]、ローマ化概念の不都合を述べた上で、「グローバル化」の有効性を問うている。「グローバル化」とは、一般に経済活動、人やモ

ノ、そしてものの見方・考え方が国家などの枠を超えて世界的規模に広がり、一体化していくことを意味する。この概念は、現在では単に現代世界の説明だけに用いられるものではなくなり、「グローバル化」を「過程」として理解し、その過程ごとに異なった形を取ると考えるようになっているが[17]、この概念を古代世界にまで遡らせて、ローマは最初のグローバル化された文化であったと論じたのであった。

グローバル化概念を遠くローマ世界に遡らせて適用する試みは、その後検討が進んだ。2008年と2010年に開催された理論ローマ考古学会議（the Theoretical Roman Archaeology Conference 通称 TRAC）の集会やその後のワークショップなどを経て、2015年に M. Pitts & M.J. Versluys（eds.）, *Globalisation and the Roman World: World History, Connectivity and Material Culture* という論集として刊行された[18]。ローマ化に代わってグローバル化をローマ世界の説明概念として用いようとする試みがはっきり姿を見せたのである。論集の序論で編者は、ローマ帝国理解にこの概念が有効であると論じるが、寄稿した者の中には、表面上似ている事象の理解に資するところはあるものの、厳密な意味での適用は困難とする論者もいる。

こうして、「ローマ化」をめぐる議論は進んできたが、ハヴァフィールドの「ローマ化」概念への批判に始まる20世紀後半、とくに1990年代以降の活発な動きは、考古学者、とくにイギリスの考古学者の一部が主導しているものであり、議論の際の最も重要な対象はローマン・ブリテンであるといってよかろう。ただ、ヨーロッパ大陸部のローマ考古学者の大方は関与しているようにみえない。また、歴史学者も「ローマ化」概念に対して批判的な議論に積極的に参加してはいないようである。もっとも、歴史学者が「ローマ化」に違和感を持っていないというわけではない。例えば、ハヴァフィールドが務めたオックスフォード大学カムデン講座古代史教授のポストを、第二次世界大戦後の1949年から1970年まで務めたかのロナルド・サイムは、1983年の論文の中で、「現代の教科書では、『ローマ化』という言葉がしばしば用いられているが、見苦しく品のないもので、否、それ以上に時代錯誤的で誤解を導くものである」と非常に厳しい言い方でこれを退けている[19]。

2 「ローマ化」の基本的な問題点

ローマはイタリア半島中部の1都市からその国家の歩みを始め、前3世紀の前半にはイタリア半島を統一した。その後、イタリアの外に支配領域を拡大していき、前1世紀の終わり頃までに地中海周辺地域をほぼ勢力下に置いた。さらに、アルプスを越えて北西にも征服地を広げ、2世紀には北はブリテン島から南はエジプト南部、西はモロッコから東はイラクに至るまでの広大な領土を持つ大国家となったのである。以下で問題とするのは、統治領域がイタリア外に大々的に広がった帝政期のローマ国家の「統合」についてである。

前3世紀前半にイタリア半島を統一したローマは、武力では半島を支配下においたにもか

かわらず、イタリアを「統合」したと呼んでよい状態にできたのはずっと後のことであり、ローマ人はイタリアの「統合」のために多大の苦労をしたことが知られている。そのため、共和政ローマの発展を研究する者にとって、「イタリアの統合」はローマの対外拡張とともに多くの課題をもつ研究テーマであった。わが国でも、これに関して数多くの研究書や論文が刊行されている[20]。本稿では、この「イタリアの統合」は扱わず、イタリアの外に広大な支配領域を持つようになった時代のローマ国家について「統合」を問題とする。しかし、「イタリアの統合」について論じられてきた際の「ローマ市民」「ローマ市民権」「都市支配」「植民市」「『イタリア』概念」などの重要な論点は、帝政期の議論にも連続することは確認しておかねばならない。

ところで、「統合」とはどういう状態をいうのか。日本語の「統合」とは、ごく単純にいえば、複数のものを合わせて１つにすることである。「分裂」の反対語であり、様々な要素が結びついて１つのものとなる過程や結果を指すといってよかろう。社会学的な定義はもっと複雑になるが、ローマ帝国史研究の場合、広大な地域を１つの権力が支配下に置いたことで国家としても単一のものとなり得たか、国家のうちに含まれた人々やその集団が個性や多様性を維持しえたかなどが、「統合」の基礎的な定義に照らしてすぐ思い浮かぶ課題であろう。

ただ、話は少々やっかいである。そもそもローマ帝国の担い手である「ローマ人」は、広大な地域を領有するようになった時期、近現代でいう「民族」の概念には当てはまらない集団であった。ローマ帝国は、ある民族が他の諸民族を支配して形成した大国家というものではない。また、ローマ国家という共同体の正式構成員「ローマ市民」は帝国支配領域各地に広がり、故地ローマ市はもとより、イタリアからも遊離し、「国民国家」的な枠組みをはるかに超えた集団であった。しかも、広い帝国領内には、支配者ローマ人の故地であるイタリアよりももっと古い文化的伝統と都市的繁栄の実績を持つ地域もあったのである。帝国には実に多様な人々が暮らしていた。加えて、絶えず規模の大きな移住があったのと同時に、帝国の内と外とを分ける「境」が、国家を分断するような現代の「国境」とは性格の異なるものでもあった[21]。従って、「統合」されたか否かという点について、現代的な観点からの判断を適用すること自体が難しい。にもかかわらず、統合の如何を問うことは、帝国の実体を明らかにし、ローマがその世界支配によってどの程度古代の諸地域に影響を及ぼしたかを評価するために重要な課題であり、曖昧にできないのである。

さて、批判されてきた「ローマ化」概念であるが、これまで指摘があったように、まず定義レヴェルの段階で問題をはらんでいるといってよい[22]。

まず第１に、「ローマ化」とは一般に、「ローマの文化」が帝国の各地に伝わること、ないしその過程を示す概念として用いられているが、その「ローマの文化」が単一、均質のものと前提的に考えられてきたことが問題である。各地に広がった文化が「ローマの文化」というカテゴリに集約される単一、均質の文化であったかどうかは疑問である。属州に広がった

「ローマの文化」が、その地で純粋な「ローマの文化」として定着したと考えることは、学界では今や少ない。「混淆した」（hybrid）文化と理解されている。しかし、伝播する前の「ローマの」文化が純粋なカテゴリの文化であったかどうかも確かめられねばならない。

第２点目として、この「ローマの文化」が先住者の文化よりも優れたものであると何の検証もなく考えられたきたことが指摘された。「ローマ化」概念批判に際して特に厳しく指摘されたこの点は、文化の多様性を重視するようになった今日でも、論者が無意識のまま、またぞろ前提にしかねない難点と思われる。ローマの生活様式に触れた先住の人々は、いわゆるラウンド・ハウスよりもウィッラの屋敷に住みたいと願ったと、研究者は暗黙のうちに想定しがちだからである。

さらに３点目として、J・ハスキンソンが指摘するように[23]、「ローマ化」とは属州など地方の住民が「ローマの文化」を手に入れるその「過程」なのか、それとも「結果」なのか、論者によって異なっているという問題がある。ローマ化が、一方通行の動きなのか双方向の過程なのか、両用に用いられてもいる。これに関してハスキンソンは、今日ではむしろ次の点が問われるべきであるという。すなわち、果たしてどの程度「ローマ化」はローマの拡大の優先的な目的だったのか、ローマ化に対しての抵抗の気配は何であったのか、ネガティヴな結果としては何があったのか、帝国全土を通じてどの程度の偏差が認められるのか、である。彼女はさらに、「ローマの文化」は中央から属州に課されたものであったのか、それとも地方の住民が、いわば「下から」広めていったのかも、問われるべき課題であるとしている[24]。

これと関連するが、批判者たちが取り上げている重要な論点には、次の問題もある。すなわち、「ローマ」の文化を受け取ったことを検証・評価する対象は、旧説では属州エリートと考えられる人々であった。一方、「ローマ化」概念批判者たちは、属州住民の多数を占める下層の人々を中心に考えねばならないと主張するのである。

「ローマ化」概念の問題点の指摘を受けて、現在では、ローマ文化の単一性や優秀性については語られることは少なくなり、到達地域での「混淆性」も認識されるようになったと思われる。ローマ文化の伝播についても、例えばブリテン島のような地域の場合は、属州エリートが受容し実践したに過ぎず、いわば「ベニヤ板」のようなものであると説明されている。

けれども、「ローマ化」概念を用いるか否定するかにかかわらず、「ローマ文化」対「先住者の文化」、「帝国の文化」対「属州の文化」、「属州エリートの文化」対「属州下層民の文化」という二項対立の説明がなされている点は大きく変わってはいない。多様性を真に重視するのであれば、このような二項対立の単純な図式的説明を克服する必要があるのだが、それは果たして可能なのだろうか。

3　文化の伝播と変化の捉え方

「ローマ化」の問題点の指摘を研究に活かそうとする場合、最大の難点は史資料にあると思われる。文献資料はおおむね、ギリシア・ローマ文学のうちに数えられる文学作品やギリシア語・ラテン語で刻まれた碑銘である。また、文献資料が少ない属州の地域での評価で重要となる美術様式については、いわゆる「ギリシア・ローマ的」とされる様式ではないものがすなわち先住者の様式といえるのか、直ちに判断はできないという問題もある。しかし、そうした素材の扱いだけでなく、そもそも歴史上の「文化」やその変化をどう捉えるかという方法上の問題点も確認しておかねばならない。ローマ帝国による征服戦争の後に被征服地に「ローマ」の文化が伝播し帝国が均質化していくこと、あるいは伝播の過程が、概念誕生時に「ローマ化」が意味したことであった。こうした文化の伝播については、どのような方法論や観点で研究されてきただろうか。

ある文化が別の地域に及んで、その地の先住者の文化と触れたときに起こる状況については、歴史学でも考古学でもなく、人類学で早くから研究されてきた。そして、「文化変化」(culture change)、「文化変容」(acculturation)、いずれの概念を用いるにしても、多様な結果が生じることが報告された。ある文化がその地の先住者の文化を完全に同化してしまうとは考えにくく、様々な形態で先住者の文化が残ったと考えられてきている[25)]。

ところで、欧米の考古学では、「文化」を捉え解釈するために、絶えず論争を繰り広げてきた[26)]。第二次世界大戦後、とくに1960年代に、文化史復元や編年研究を行う伝統的な記述考古学への批判から生まれたニューアーケオロジーの運動は、文化の変化とその過程（プロセス）を探求する「プロセス考古学」として確立された。しかし、1980年代に入ると、イアン・ホダーらイギリスの考古学者たちがプロセス考古学を批判して、「ポスト・プロセス考古学」と呼ばれる考古学の新潮流を生み出した。

プロセス考古学は、「科学」を標榜して客観主義と実証主義に立ち、普遍的な法則性を考えようとした。これに対して、ポスト・プロセス考古学は、プロセス考古学が経済を重視しすぎている点を指摘した。また、実証主義に基づいた科学性を標榜しているが、その「科学」自体が植民地主義的でヨーロッパ中心主義的ではないかと論じて、プロセス考古学の基軸となる論点を批判している。そして、絶対的な客観性はありえず、行為とその意味は歴史的な脈絡の中にあり、考古学者の研究もその置かれた歴史的脈絡に拘束される、と考えたのである。ポスト・プロセス考古学では、社会を構成する要因を生み出した個々の歴史的状況を重視し、地域の伝統を考慮する立場に立っている。

人類学研究における「文化変容」の議論も考古学における文化をめぐる論争も、20世紀の終盤にはヨーロッパ中心主義に対する批判を受け容れて自らの議論を整備しただけでなく、考古学者の研究が歴史的に拘束されるという認識に加えて、一部ではポスト・コロニアリズムも受容し、これを理論的な支柱にして議論する研究者がでてきた。こうした流れのな

かで、ハヴァフィールドの「ローマ化」概念が批判されたのである。

しかし、「文化」の多様性を認識し、「ローマ化」概念創出の歴史的背景を理解したとしても、史資料の残存状態に問題を抱える属州史研究にあっては、個別地域の重視になると不明な点が多すぎて、歴史の説明に空白が生まれるばかりでなく、ローマ帝国の世界史的意義を考えるという大きな課題からも遠のいてしまうであろう。「ローマ化」批判後に個別属州研究への動きが活発になったが、R・ヒングリが視野の広い「グローバル化」の議論を提示したことは、その適否はともかくとして、方向性として私は有意義であったと考えている。けれども、こうした新しい概念を用いずに、考古学の方法的な立場は伝統的なやり方のままでローマ帝国の変容を捉えようとする試みもある。次にそれを紹介しよう。

4 「ローマ化」の過程分析モデル

これまで述べてきたように、イギリスの一部の考古学者を中心として、「ローマ化」をもはや使用しない、新たな概念でもってローマ帝国を論じるべきとする動きが強力に進められているが、一方で「ローマ化」概念を維持しながら、それをより弾力的に使用して古代世界を説明していこうとする動きもある。ヨーロッパの大陸の考古学者は、先述のイギリスの一部の考古学者のように「ローマ化」に対して攻撃的ではなく、むしろこれを維持しつつ研究を進めようとしている。私が注目したのは、ドイツ考古学研究所の行った研究の成果である。

ドイツ考古学研究所の第6研究班は、2013年から2017年にかけて「連続と不連続 ―変化の中の地域的伝統とローマの支配―」ほか2つのプロジェクトを実施し、2013年マドリッド、2014年ベルリン、2015年イェルサレム、2016年にオリンピアで研究集会を開催した。そして、その成果を2019年に1冊の報告書として刊行したが、その題名は『連続と不連続 ―ローマ化の諸過程―』となっている[27]。副題に「イベリア半島と近東との間の地域に関するケーススタディ」とあるように、スペイン、サモス、小アジア、ユダヤ、エジプトのケースが分析されているが、編者によれば、この報告書の基軸は、フランスの古代史研究者エルヴェ・アングレベールの「ローマ化」モデルに沿って分析し、そのモデルの有効性を検証することにあったという。以下では、アングレベールのモデルではなく、ドイツ考古学研究所の作業を紹介しよう。

アングレベールは、2005年刊行の編書 *Histoire de la civilisation romaine* において[28]、「ローマ化」の諸過程に関する概念を提示している。本報告書の編者は、アングレベールの理論における「諸過程」を次の3つの段階に集約して、考古学や貨幣学の面からその適用性を試したと記す。

① ローマ帝国が征服した地域に「衝撃」を与える段階。

② 文化交流を通じてローマのモデルが「普及」（拡散）する段階

③　特に地域のエリートたちによってローマの「模倣」がなされる段階[29]

まず、最初の「衝撃」の段階であるが、これは地域の属州化に関わる事柄が、そのメルクマールとなる。すなわち、軍事支配、司法上の枠組み、財政上の強制、行政上の要請、さらには新しい地域の都市化である。加えて、組織的な貨幣の製造も加わろう。この「衝撃」のあり方は地域によって様々で、「衝撃」の段階から次の「普及」に移る時間についても違いがあった。イベリア半島では、前3世紀の終わり頃からローマ軍が駐留していたが、北西部の征服は前26年から7年間ほどの戦争（いわゆるカンタブリア戦争）までなされず、法制度上のローマ化が生じる帝政期まで、「衝撃」の段階がじつに長く継続した。また、「衝撃」は経験しても「普及」に移ることにはならない地域もあった。例えば、エジプトのアビュドスの場合、ローマの軍隊がやって来ることで「衝撃」の段階は経験したものの、ローマが継ぎ目なくエジプトの既存の構造に入り込むことに成功したので、「普及」の段階についての証拠は存在しないという。

次いで「普及」の段階である。「普及」とは文化交流の結果であり、ローマのモデルが非常に広範囲に伝播する状況へと到達することである。この段階は文化的な現象であり、人の社会的な能力や行動、人的接触や日常生活、物質的で具体的なモノやコトなど、ローマが課したものを越えた事柄が問題になる。つまり、税や市民権、軍の存在、新都市の建設などをともなう「衝撃」の段階を越えるものである。「普及」の段階になると、都市は、行政の中心として公共建造物を整え、その役割が強化された。東地中海地域の例でとくに明瞭になる。小アジアでは非常に多くの都市が独自の貨幣を製造して、独立した共同体であることを示した。対照的に、西地中海地域、とくにヒスパニア属州では、都市が「衝撃」により打ち立てられた秩序の枠組みの中で、ローマのモデルを借り、独立して行動できる政治的統一体になった。

普及したものは、ローマ風の生活のあらゆる面に及んだ。帝国東部では貨幣を通じてローマ風の肖像が広がり、西部ではラテン文字が受け入れられた。ローマ風の水道、円形闘技場、橋梁、道路の建設もそうである。あらゆる種類の記念物にも及んだ。この「普及」と次の「模倣」の段階とは密接に連携しているが、貨幣の製造は例外であった。貨幣は常に特定の地域と使用者に焦点を合わせて作られたので、「普及」は「模倣」に結果しなかった。

最後の「模倣」は、「衝撃」と「普及」の過程がすでに完了して初めて生じた。また、「模倣」は、住民自身が自発性にローマのモデルを真似ようと積極的になった場合に生じた。ローマ風の生活様式に加わりたいとする個人の意思表明が求められたのである。模倣は、理論的にはあらゆる階層で可能ではあったが、考古学的な証拠では、エリート階層でそれははっきりする。模倣は、考古学的調査や碑文史料からは、一般に都市的背景の中で観察可能である。

この報告書の編者たちは、以上のような調査・分析を報告しつつ、アングレベールの「3つの過程」を見出すことは可能で、それぞれのコースを辿ることも可能であるとまとめ

ている。「衝撃」の効果は、調査したすべてにおいてはっきり見られ、「普及」もしばしば見られるが、「模倣」となると例外的な場合にのみ見られたとしている。実は、「ローマの」と受け取れるモデルの「普及」を「模倣」と見なすことは難しい。それは、文化の用語で「ローマの」と見なせるのが何であるか見定めることができないためである。より厳密に言えば、「ローマの」と性格づけることができるのは、公的な領域でローマ国家に属していることがはっきりしている、法制度、行政、軍事、そして皇帝礼拝などだけである。また、「衝撃」「普及」「模倣」の3つは、はっきりと区分が可能な自己完結的なものではなく、それぞれの末端において立ち現れる。「ローマ化」とは、素材の中に「ローマらしさ」を見つけることができない場合でも「衝撃」の枠内で生じえたが、「普及」と「模倣」は「衝撃」を基にして生じるものの、それは政治的・法的なローマ化にとってではなく、おそらく文化的なローマ化に必要とされた。従って、3つの「過程」は階層状のものではない。また、「模倣」は達成されたローマ化の完成やたいへん高い段階を意味すると勘違いされてはならないのである。

この報告書は、アングレベールの概念モデルが、単にローマ化の諸現象を描き出すだけでなく、それが提供する展望の構築する力の故に、新しい知見を生み出し、多くの科学的な利益を創出もできると、非常に高く評価している。また、このモデルが、帝国の西半と東半の両方にも適用可能であるともしている。

以上の粗い紹介でも明らかなように、この報告書に収められたケーススタディによれば、ローマの征服などの最初の段階はともかくとして、その後の「ローマ化」は段階的に進むのではなく、地域の事情などによって多様な結果が生じたのである。

しかし、この報告書が明らかにした「ローマ化」の「諸過程」をローマ帝国の実体とその歴史的意義の理解に反映させるとすれば、報告書が最後に述べている、「ローマの」とはいったい何であるのか、これを明らかにすることが避けられない課題である。考古学者たちが前世紀の終わりから熱心に論じてきた「アイデンティティ」がその問題に関わる。次章で、その点に関わる議論を紹介しておこう。

5 アイデンティティの問題

周知のように、「アイデンティティ」は哲学の概念として、また心理学に転用されて、盛んに用いられてきた。そこでは、「同一性」や「自我同一性」と訳されよう。この概念は社会科学や歴史学でも用いられるようになり、前世紀の末から「ナショナル・アイデンティティ」「エスニック・アイデンティティ」などとしてさかんに議論に使用されるようになった。「国民国家」に関する議論がその典型だが、グローバル化の進展を受けた世界情勢を背景に、「アイデンティティの危機」を論の出発点として、実に様々な分野でこの概念に絡めた研究が進行している。とくに歴史学の研究者はこのアイデンティティを「記憶」と結びつ

けて論じる。いわゆる「記憶の歴史学」への関心の高まりも、アイデンティティの議論と不可分の関係にあったといってよかろう[30]。

古代ローマの研究にあっても、アイデンティティは重要なテーマであり、同時に有効な議論のツールである。すでに述べたように、ローマ国家の正式構成員「ローマ人」は近代的な「民族」で理解できるものではないので、その実体をどのように把握すべきかという問題は重要であり、それは即、「ローマ人」のアイデンティティを問うことに繋がるのである。

「統合」と絡めるならば、征服戦争によりローマに支配されるようになった地域で、人々やその集団は自己をどのように認識し「帝国の民」として暮らしたのかが重要な研究の課題として存在する。属州の人々の「アイデンティティ」は果たして何であったのかが問題なのである。ローマは国家の拡大とともに市民権を付与し続けたので、帝国領の各地でローマ市民は増加していったが、人々は市民権の獲得を通じてローマ人として自己を認識するようになったのか。この論点に関わるのが「ローマ化」であった。ローマ化概念に沿った説明では、属州の人々もローマ市民権を得て、ローマ風の生活をすることによって「ローマ風」に、「ローマ人」になっていったと考えられてきたのである。しかし、一連の「ローマ化」概念批判はこうした解釈を否定したので、従来よりも一層、属州住民の生活の実態や自己理解について問われねばならなくなっている。

さて、ローマ帝国下での人々やその集団のアイデンティティについては、歴史学者ばかりでなく、ローマ考古学者たちも熱心に論じてきた。「アイデンティティ」を論著に掲げて論じてきたのは考古学者の方が多いといってよいかもしれない。

1980年代のイギリス考古学界でのポスト・プロセス考古学の登場後、アイデンティティは研究対象として重視されるようになった。1990年代に生み出された「認知考古学」は、より立ち入って、製作されたモノから人間の認識を知ることができるか研究するようになった。そのために、考古学者たちは哲学者や社会学者の発想を方法的に利用するようになったが、中でもドイツのマルティン・ハイデッガーの哲学、イギリスの社会学者アントニー・ギデンズの社会理論の活用が顕著である。さらに、フェミニストの理論にも影響されている[31]。

ローマ考古学の分野でも理論ローマ考古学会議（TRAC）が結成され、1991年から年次大会を開催するようになり、この組織のメンバーが中心になって、アイデンティティを重要課題として取り上げるようになった。そして、ローマ帝国における「アイデンティティ」の問題についてまとまった論集として現れたのが、1998年のR・ロレンスとJ・ベリの編集にかかる *Cultural Identity in the Roman Empire* である[32]。これは、1995年にイングランドのレディング市で開催されたTRACの集会の成果を踏まえたものである。ローマ帝国における文化的アイデンティティを構成するものは何であるかを探るために、エスニシティや市民権などを取り上げた。そして、ローマが他の文化との接触後に生じた変化の過程を理解するために、伝統的に知られてきた「ローマ化」を、その概念の成立背景を述べつつ批判し、帝国で生じたことが、「征服者ローマ対蛮族」の単純な二項対立図式では処理できない複雑なもの

であったとして、諸地域の実態に即して検討している。ただ、個々の章で扱われているケースはイタリアと西方属州、そして北アフリカであり、帝国東部が含まれていない。

この論集は考古学者だけではなく、古典文学研究者、古代史研究者も関わったが、以後、「ローマ化」概念に批判的な立場の考古学者たちが中心になって、物質文化・ローマ帝国主義・アイデンティティの3者を重要要素として、次々議論を展開していった[33)]。

ところで、考古学者たちはアイデンティティとして何を取り上げてきたのだろうか。刊行された論著を見ると、社会的アイデンティティ、文化的アイデンティティなどの語が目に付くが、M・ピッツは2007年の論文において、最近の10年間以上のローマのアイデンティティに関わる出版物を分析して、その60パーセント以上が文化、より具体的にはエスニック・アイデンティティを扱っていると報告している[34)]。「エスニック・アイデンティティ」というテーマは、すでに述べたように、ローマ史の場合、近現代の議論のようには扱えないところがある。しかし、古代史の状況でも、エスニック・アイデンティティは問題として取り上げることは可能である。属州各地の住人やその集団は、ローマ帝国社会の指導的政治支配層からその居住地と結びつけられて評価が与えられたため、近現代の民族とは異なる性格ではあるが、似た問題状況が存在したのである。例えば、共和政末期の第1回三頭政治が始まった頃、キケロは現在のトルコに相当する属州アシアの総督となる弟クイントスに宛てた書簡で、次のように書いている。

「それ故、全精神と熱意を傾けて、これまでも実施してきた方針に打ち込みたまえ。すなわち、元老院とローマ国民が君の信義に委ね、信頼して任せた人々を愛し、あらゆる方法を用いて守り、彼らができるだけ幸福に暮らせるようにしてやりたまえ。もし（担当属州を決める）抽籤で、君がアフリカやヒスパニア、あるいはガリアの人々のような、恐ろしい、未開の民族を統治することになっていたとしても、それでも彼らの利益のために配慮し、彼らに役立つことや彼らの安寧のために奉仕することが、教養ある文明人としての君の務めであっただろう。いわんや、君が今統治しているのは、文明的であるだけでなく、文明を他にも伝えたと考えられるような類いの人々なのだから、我々が彼らから受け取ったものを、今度は彼らに与えるのが当然の務めだ。」（小池和子訳　一部地名表記を変更）[35)]

こうしたローマ人の記述から、ローマ人の他者認識を抽出して、「エスニック」なものの見方を知ることが可能である。同時に、史料を被支配者側の視点から読み直すことができれば、ローマ人ではなかった者の理解や「ローマ人となる」ことの意味も推測できるかもしれない。

ところで、ここで描かれる「恐ろしい、未開の民族」たるアフリカ、イベリア半島、そしてガリアの人々というカテゴリと、「文明」の民であるギリシアや小アジアというカテゴリの対比は、帝政期になると変化する。これらの「野蛮な」地域といわれたところから政治支配層に加わる者が出て、やがて皇帝すら現れた。一方で「文明」のギリシア本土からは元老院議員となった者すら数は少ない。住民集団の「文明」の観点からの評価と支配・被支配の

政治的関係とは、必ずしも合致しなくなったのである。では、2 世紀のローマ市民権を持つギリシア人都市の住民は、どのようなアイデンティティを持っていたのだろうか。この問題の考察のためには、帝国住民が複数のアイデンティティを有していたことや、アイデンティティの可変性も考慮に入れる必要があろう。

さて、上述のピッツの指摘を受けて、ルイス・レヴェルは 2016 年の *Ways of Being Roman: Discourses of Identity in the Roman West* と題した著書[36]において、アイデンティティ研究の 3 つの重要な要素として、女性とジェンダー、子供と家族、そして身体と性を挙げている。そして、自らの著書において、「ローマ」というエスニシティと多様な帝国のエスニシティの問題、属州エリートと非エリートの問題、ジェンダー、そして年齢、つまり大人と子供の問題を論じている。ただ、こうしたアイデンティティのカテゴリについては、いわゆる「本質主義」との関連が問題として出てこようが、ここでは立ち入らないことにする[37]。

これまでの考古学からの議論では、「帝国アイデンティティ」「地域アイデンティティ」「属州アイデンティティ」などが挙げられたが、帝国と属州、中央と地方、ローマ人と属州人といった二項対立的枠組みで整理しつつ、現実はより多文化的で複雑であったとまとめるような論調が目立っている。このような論調は曖昧であるだけでなく、すっきりとした議論の整理も阻むものである。それは、使用される用語、概念が曖昧であり、定義の段階でもはや多様な解釈を含み込んでしまうからである。アインデンティティだけでなく、「文化」それ自体が定義困難なほど多義である。考古学者たちの論著には、「アイデンティティ」「物質文化」についてのまずは定義的説明を述べるというケースが目立っているが、これは致し方ないものの、その段階で検討の仕方の違いが生じることになる。

私たちは、ローマ帝国住民のアイデンティティについて、具体的にどこまで知ることができ、どこまで解釈を述べることができるのだろうか。具体的な作業での難しさを、一番議論がなされているブリテン島から例をあげて見てみたい。文字で書かれた資料のきわめて少ないこの辺境の属州では、彫刻・石像・モザイク画など、美術資料が重要な検討の素材である。ここでは図版を提示できないが、よく知られているモザイク画を 2 点とりあげよう[38]。ブリテン島各所で発見されているモザイク画は、とくに裕福なウィッラ所有者の生活空間で用いられたもので、絵の題材から、所有者のギリシア・ローマの神話や文学への関心が認められ、ローマ風生活様式が展開されたとみなされてきた。共通の画材や描かれ方から、職人の大陸からの移動や職人が見本を利用していたことも推定されている。ここから、ウィッラに居住した人々は、「ローマ人」としてアイデンティティを有していたと考えてよいのだろうか。

出土したモザイク画の中には、有名なヨークシャー州のラドストン出土の「ウェヌスのモザイク」のように、既成の枠組みでは理解が困難な事例がある。このモザイク画では、「ローマ化」が進行したとされている北アフリカで出土したモザイク画にしばしば見られるライオンや雄牛が描かれているが、中央部円内の「ウェヌス」の姿は、いわゆるギリシア・ローマ

様式の女神とはおおよそ似ていない。立体的な複雑さというものがない、平面的で単調な姿である。これは、この地のウィッラの所有者、ないし雇用した職人が、ギリシア・ローマ神話から「転用」したものなのか、あるいは独自の創作なのか、判断が難しいのである。この邸宅に住んだ人物は、自らを「ローマ人」「ブリトン人」、あるいは地域の部族など、どのように認識していたのだろうか。

また、ケント州のルーリントン出土のモザイク画では、ギリシア神話のモチーフである「牡牛に乗ったエウロペ」が描かれていた。ところが、このモザイク画が描かれた同じ時期に、このウィッラの建物の一部、エウロペを描いたモザイク画のある食堂の隣に、キリスト教のチャペルとして利用された空間があったことが知られている。このウィッラに暮らした住人は、どのような宗教的心情をもち、ギリシア神話をどのように見ていたのだろうか。

ブリテン島のような辺境属州には、居住した人々の自己認識がどのようであったか、推測が難しい例が多くある。同時に、先住者の行動を理解することも困難である。一時期学界では、「ローマ化」の説明に反対して、先住者の「抵抗」を主張する意見が出されたことがあったが、「抵抗」に着目することはよいとしても、その抵抗がいかなる自己認識に絡んで生じた「怒り」の感情に基づいているかは、史資料からは明らかにできていない[39]。帝国の西部は、アイデンティティの議論を誘う要素が豊かであるが、一方で、確かな情報を得て解釈を述べることができるケースは少ないのである。

おわりに

100年以上前にハヴァフィールドの構想した「ローマ化」には、今日多くの難点があるといわざるをえない。けれども、ローマ帝国の支配とともに征服者の文化が伝播したこと自体に疑いはなく、「ローマ風」の生活様式が広まったことは確かである。そうした文化の広がりのあり方を捉えその意味を解釈するために、考古学研究が多大の貢献をしてきたのであった。ただ、「ローマ化」概念を否定して新たな過去の姿を理論的な手立てを重視しつつ描き出そうとする立場の考古学研究と、「ローマ化」概念を維持しつつ実態の把握と類型化から歴史像をつかみ出そうとする立場の学者たちとの間に、実りある議論のやりとりがあるようにみえないのはたいへん残念である。このことは、南雲泰輔氏が古代末期研究に関わる考古学の動向を論じた際に紹介した、考古学研究の系統に関するLavanの指摘とおおむね同じである[40]。南雲氏は、理論的な考古学が調査している地域が北イタリアと北西ヨーロッパであって、地中海側については盛んでないと紹介しているが[41]、先に指摘したように、「ローマ化」概念批判者たちの扱う帝国領域も、ブリテン島を中心としてやはり帝国西部に偏っている。

ヘレニズム時代以来都市が繁栄している帝国東部と違って、帝国西部は新たにローマ人が都市を建てたり、都市制度を持ち込んだりした地域が多い。そこでは、ローマの宗教的な考

え方や儀礼も広く伝播したと考えられている。地域のエリートは、自分たちの威信や社会的地位を強化するために、ローマの様式を用いた。しかし、ローマの宗教儀礼は拡大したものの、在地の信仰を排除するところまではいかなかった。そのため、様々な現象が見られ、多様な解釈を提示することができる。それが、考古学研究者たちが帝国西部を重視してきた理由であろう。史資料が少ないために「理論」を投入し、考古学が歴史学の補助学に留まらず、自ら歴史像を描き出そうと試みたのだと思われる。

さて、こうした学界動向の中で、今後「統合」の問題はいかに検討されるべきであろうか。

まず、考古学者中心の「ローマ化」見直し作業に関しては、その理論的考証の努力を評価しつつも、われわれは今一度史資料にたち戻り、先に紹介した「ローマ化の過程」研究のような、段階的分類と比較、そして類型化を行う研究と接合させることを試みるべきではなかろうか。「ローマ帝国は統合により世界を変えたか」という大きな問題の中に、実証的な考古学研究の成果と、問題意識的で理論的な議論とを検証しつつ取り込んでいくことが大切である。なにより、支配領域の統合を論じるにふさわしく、帝国西部だけでなく東部も加えた議論ができるようにすることが望ましい。

帝国の東部、とくにギリシア本土や小アジアのギリシア人都市などについては、ローマの支配によって都市社会の政治体制や社会のあり方、人々の考え方がどのように変化したか、熱心に研究されてきた。しかし、ローマ支配対ギリシアという二項対立の図式に回収されがちな議論が主であった。帝政期のギリシアについても、考古学者スーザン・オルコックが大きな貢献をしているが、ギリシア人都市の主体性を重視しつつ、二項対立の図式に陥らない、新たな視角からのギリシア人都市研究が今後進められれば、ローマ帝国時代のギリシア像は豊かなものになるだろう。その成果を帝国西部の研究と総合させていかねばならない。ローマ帝国下で「ローマ人」というアイデンティティが果たして形成されたか否かを検討する上でも、帝国東部は解決すべき問題を抱えている。とりわけギリシア人、ユダヤ人、そしてエジプトの人々の宗教観は独特であり、これらの人々の自己理解やそれに関わる歴史認識は、明らかに「ローマ化」の観点からは扱えないだろう[42]。こうした点で、考古学と歴史学にまたがるG・ウルフの研究成果は、今後の研究にとっても重要な参考文献となると筆者は考える。ウルフの研究といえば、前1世紀から後1世紀にかけてのガリアにおいて、住民上層が同化されて「ローマ風になっていく」「ローマ人になる」過程を描き出した *Becoming Roman: the Origins of Provincial Civilisation in Gaul*[43] が有名であるが、帝国東部についての文化変容やアイデンティティの研究も広く行っていて、考察すべき問題点が適切に提示されている[44]。

以上、本稿では、考古学研究からのアプローチを主に紹介・検討したが、E・デンチがイタリア半島居住者の自己理解や他者認識を解明し、「ローマ」のアイデンティティのあり方を長期間にわたって分析するなど、歴史学者のアイデンティティに関わる研究成果も蓄積さ

れてきている[45]。そのデンチは近著において、ハヴァフィールドの「ローマ化」概念から離れて、しかし考古学者の議論とも距離を置きつつ、ローマの支配がもたらした影響を理解するための重要な問題領域について、独自の整理を試みた[46]。さらに、A・C・ジョンストンも、ガリアとスペインにおける「アイデンティティ」について、適宜考古学情報も取り入れながらも、文学的資料と碑文史料に基づいた研究を行って成果を発表している[47]。考古学研究の成果を取り込みつつも、歴史学者の独自でスケールの大きな作業が今後ますます求められるだろう。

最後に、注意すべき点と筆者が考えるところを述べて、本稿を擱筆したい。これまで紹介してきたように、帝国統合の説明モデルとしての「ローマ化」をめぐる議論では、「文化」が問題となってきた。ローマ人のアイデンティティをめぐっても、「ローマ人らしさ」とは「ローマ市民権」の問題ではなく、文化や生活様式が重要であると考えられる[48]。それは間違いないが、属州での「ローマ」の文化や生活様式の受容については、政治支配の問題があることを忘れてはなるまい。先に紹介したキケロの書簡の記述や、タキトゥス『アグリコラ』第21章の「ローマ化のカタログ」と呼ばれる有名な一節をみれば、ローマ帝国政府が何らかの政策として「ローマ化」を推進したと想定できそうだが、今日の属州史の実証的研究の成果に拠ると、整った政策を帝国政府が実施したとは考えにくいことが判明している[49]。けれども、そのことと、皇帝権力による支配を属州の人々が受けた事実とは、また別の問題である。この支配という政治的要因を、「ローマ化」という言葉を使うか使わないかにかかわらず、帝国領の実態分析を進める上で検討の基礎に置かねばならない。そして、皇帝権力の動きと辺境を含めた帝国領全体の動向を、同時にかつ同じ重さで考察すべきであろう。

※　考古学におけるアイデンティティの問題について、京都大学大学院文学研究科考古学専修准教授の下垣仁志氏から貴重な情報をいただきました。記してお礼を申し上げます。
※　本稿は、本報告書18号と19号の「コラム　西洋古代史の泉」でごく簡単に触れてきた研究動向を詳しく説明し、今後の研究課題を整理することを試みた小品です。本稿の一部は、JSPS科研費18K01028の助成を受けたものです。

註

1）例えば、2003年1月5日朝日新聞の第9面「特集　欧州膨張」の見出し「古代ローマ帝国に匹敵」や、宮島喬・羽場久美子編『ヨーロッパ統合のゆくえ』人文書院、2001年など。拙稿「ヨーロッパ統合と古代ローマ帝国」紀平英作編『ヨーロッパ統合の理念と軌跡』京都大学学術出版会、2004年、22-53ページを参照されたい。

2）白鳥浩「『新たなローマ帝国』から『欧州合衆国』へ？」『国際政治』（日本国際政治学会）142、2005年、145ページ。

3）G. de Kleijn & S. Benoist, *Integration in Rome and in the Roman World*, Leiden & Boston, 2014.

4）C. Ando, *Imperial Ideology and Provincial Loyalty in the Roman Empire*, Berkeley/Los Angeles &

London, 2000.

5）拙著『海のかなたのローマ帝国　―古代ローマとブリテン島―』岩波書店、2003 年、増補新版、2015 年。以下でこの拙著の該当箇所を指示する際は、増補新版のページを示す。

6）前掲書、38-40 ページ。

7）前掲書、7-8 ページ、36-43 ページ。

8）前掲書、43-45 ページ。

9）前掲書、50-51 ページ。

10）前掲書、50-51 ページ。

11）ポスト・コロニアリズムの立場に立つ考古学者たちのハヴァフィールド批判、「ローマ化」批判については、前掲書、8-10 ページ、51-55 ページを参照されたい。

12）D. J. Mattingly, Being Roman: Expressing Identity in a Provincial Setting, *Journal of Roman Archaeology* 17, 2004, p.6.

13）Id.（ed.）, *Dialogues in Roman Imperialism: Power, Discourses, and Discrepant Experience in the Roman Empire*, Portmouth, 1997.

14）E・W・サイード（大橋洋一訳）『文化と帝国主義』1、みすず書房、1998 年、79-98 ページ。

15）J. Webster, Creolising the Roman Provinces, *American Journal of Archaeology* 105, 2001, pp. 209-225.

16）R. Hingley, *Globalizing Roman Culture: Unity, Diversity and Empire*, London & New York, 2005.

17）ジョン･モリッシー 他（上杉和央監訳）『近現代の空間を読み解く』古今書院、2017 年、166-167 ページ。

18）M. Pitts & M.J. Versluys（eds.）, *Globalisation and the Roman World: World History, Connectivity and Material Culture*, Cambridge, 2015. 本書については、わが国でも長谷川岳男氏による書評が発表されている。『西洋古典学研究』66，2018 年、117-119 ページ。

19）R. Syme, Rome and the Nations, *Diogenes* 124, 1983, p. 35 再録 Id., *Roman Papers* IV, Oxford, 1988, p.64. なお、D. J.Mattingly, op. cit., p.6 は、このサイムの記述を註で引いて、「ローマ化」概念の簡潔で当を得た拒絶だと述べている。

20）長谷川博隆氏、石川勝二氏、岩井経夫氏、砂田徹氏らの著書を参照されたい。

21）この点について簡単には拙書『新・ローマ帝国衰亡史』岩波書店、2013 年、27-31 ページを参照されたい。

22）拙著『海のかなたのローマ帝国』20 ページ、54-55 ページ。本稿執筆に際して、この定義に関わる問題点については、特に J. Huskinson（ed.）, *Experiencing Rome: Culture, Identity and Power in the Roman Empire*, London, 2000　及び D.J. Mattingley, op.cit. pp.5-9 を参照した。

23）J. Huskinson, Looking for Culture, Identity and Power, in: Id.（ed.）, *op.cit*, p.20.

24）Ibid., pp. 20-23.

25）ギリシア文化の伝播についての大戸千之『ヘレニズムとオリエント　―歴史の中の文化変容―』ミネルヴァ書房、1993 年、163-170 ページを参照。とくに、169-170 ページの註 14 の説明が重要である。

26）以下のプロセス考古学やポスト・プロセス考古学の説明については、次の文献を参照した。安斎正人『理論考古学　―モノからコトへ―』柏書房、1994 年、22-46 ページ；同編『現代考古学の方法と理論　I』同成社、1999 年、159-171 ページ；泉拓良・上原真人編『考古学　―その方法と現状―』放送大学教育振興会、2009 年、287-295 ページ；ブルース・G・トリッガー（下垣仁志訳）『考古学的思考の歴史』同成社、2015 年、279-349 ページ。

27）Th. G. Schattner et al.（hrsg）, *Kontinuität und Diskontinuität, Prozesse der Romanisierung*, Rahden/Westf., 2019.

28）H. Inglebert（dir.）, *Histoire de la civilisation romaine,* Paris, 2005. とくに pp.435-449.

29）報告書では、「衝撃」「拡散」「模倣」の各段階について、A･グーツフェルトが軍事、政治などの指標を一覧で整理している。Th.G. Schattner et al.（hrsg.）, *op.cit*., S.5-7.

30）歴史学系のアイデンティティ問題を扱った著作は数多いが、本稿は問題関心の点で、ヨーロッパの自己認識を検証する谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社、2003

年や Takashi Minamikawa（ed.）, *Material Culture, Mentality and Historical Identity in the Ancient World: Understanding the Celts, Greeks, Romans and the Modern Europeans*, Kyoto University, 2004 の研究の延長上にある。

31）この点については、J. トーマス（下垣仁志・佐藤啓介訳）『解釈考古学　―先史社会の時間・文化・アイデンティティ―』同成社、2012 年、および、ブルース・G・トリッガー、前掲書の特に第 8 章を参照した。

32）R. Laurence & J. Berry（eds.）, *Cultural Identity in the Roman Empire*, London & New York, 1998.

33）関連する文献を以下に挙げておこう。J. Huskinson（ed.）, *op. cit.* ; L. Revell, *Roman Imperialism and Local Identities*, Cambridge, 2009 ; S. Hales & T. Hodos（eds.）, *Material Culture and Social Identities in the Ancient World*, Cambridge, 2010 ; D.J. Mattingly, *Imperialism, Power, and Identity: Experiencing the Roman Empire*, Princeton & Oxford, 2011; H. Eckardt, *Objects and Identities : Roman Britain and the North-Western Provinces*, Oxford, 2014 ; L.Revell, *Ways of Being Roman: Discourses of Identity in the Roman West*, Oxford, 2016 ; W. Vanacker & A. Zuiderhoek（eds.）, *Imperial Identities in the Roman World,* London & New York, 2017 ; A. Gavrielatos（ed.）, *Self-Presentation and Identity in the Roman World*, Newcastle upon Tyne, 2017 ; S. G. Sanchez & A. Guglielmi（eds.）, *Romans and Barbarians beyond the Frontiers : Archaeology, Ideology and Identities in the North*, Oxford, 2017.　なお、L. Revell, *Roman Imperialism and Local Identities* については、本報告書第 15 号掲載の野崎由利子「不可視を可視化することは可能か　―Louise Revell, *Roman Imperialism and Local Identities* の方法論をめぐって―」『西洋古代史研究』15、2015 年、47-55 ページがギデンズに基づいたエージェント理論など、その議論を紹介し検討している。

34）M. Pitts, Emperor's New Clothes? The Utility of Identity in Roman Archaeology, *American Journal of Archaeology* 111, 2007, pp. 693-713 上述註 33 記載の L. Revell, *Ways of Being Roman*, p.8 も参照。

35）Cicero, *Epistulae ad Quintum Fratrem*, I, 1, 27；キケロ―（根本和子訳）「弟クイントゥス宛書簡集」『キケロ―選集』16、岩波書店、2002 年、363 ページ。

36）L.Revell, *Ways of Being Roman: Discourses of Identity in the Roman West*.（註 33 記）

37）さしあたり、J. Huskinson（ed.）, *op. cit.*, pp.10-11 を参照されたい。

38）以下のブリテン島のモザイク画に関する議論は、拙稿「イギリスで『古代ローマ文明』を楽しもう」P・サルウェイ（南川高志訳）『古代のイギリス』岩波書店、2005 年所収、138-140 ページ：J・ハスキンソン（佐野光宜訳）「属州ブリタンニアにおける文化と社会関係」ピーター・サルウェイ編（南川高志監訳）『ローマ帝国時代のブリテン島』（オックスフォードブリテン諸島の歴史　1）、慶應義塾大学出版会、2011 年、140-183 ページ、及び拙著『海のかなたのローマ帝国』、234-237 ページを参照されたい。本稿は、ハスキンソンの説明を参考にしている。以下で紹介するラドストン出土の「ウェヌスのモザイク」の図版は、ピーター・サルウェイ編、前掲書の 140 ページに、ルーリントン出土のモザイク画は拙稿「イギリスで『古代ローマ文明』を楽しもう」139 ページに掲載されている。

39）J・ハスキンソン、前掲論文、182 ページ。

40）南雲泰輔「『古代末期』研究と考古学をめぐる一動向　―Luke Lanvan と『古代末期考古学』―」『古代史年報』8、2010 年、29-44 ページ、特に 33-35 ページ。

41）前掲論文、34 ページ。

42）ギリシアについては、わが国では長谷川岳男「ギリシア「古典期」の創造　―ローマ帝政期におけるギリシア人の歴史認識―」『西洋史研究』新輯 32、2003 年、24-55 ページが、新しい観点からの考察の先駆けをなした。

43）G.Woolf, *Becoming Roman: the Origins of Provincial Civilisation in Gaul*, Cambridge, 1998.

44）Id., Becoming Roman, Staying Greek: Culture, Identity and the Civilizing Process in the Roman East, *Proceedings of the Cambridge Philological Society* 40, 1994, pp. 116-143 などを参照。

45）E. Dench, *From Barbarians to New Men: Greek, Roman, and Modern Perceptions of Peoples of the Central Apennines,* Oxford, 1995; Id., *Romulus's Asylum: Roman Identities from the Age of Alexander to the Age of Hadrian,* Oxford, 2005.

46）Id., *Empire and Political Cultures in the Roman World*, Cambridge, 2018.　本書には、南雲泰輔氏による書評が『西洋古典学研究』68、2020 年、146-149 ページにあるので、参照されたい。

47）A.C. Johnston, *The Sons of Remus: Identity in Roman Gaul and Spain*, Cambridge/M. & London, 2017.

48）ローマ人の自己認識、アイデンティティについては、筆者は試論の形で発表したことがあるが、そこでも、市民権以外に、「ローマ人らしい生活」「ローマ人としての自己認識」を重視している。拙著『新・ローマ帝国衰亡史』32-49 ページを参照されたい。

49）A.T. Fear, *Rome and Baetica: Urbanization in Southern Spain c.50 BC- AD150,* Oxford, 1996 などを参照。